

(2) 期待される研究成果

【期待される研究成果】

本事業に期待される研究成果は、具体的に以下の2項目である。

① 認知症やがんの克服、老化のメカニズムの解明、遺失機能の再生技術の創出

認知症研究においては、認知症で観察されるタウ凝集機構解明と凝集阻害剤のスクリーニング、がん研究においては、慢性的なDNA損傷ストレスが細胞寿命とゲノムの安定性に及ぼす影響の解析、老化研究においては、最先端の遺伝学を用いた老化関連遺伝子の探索・同定と機能解析、再生医療研究においては、関節再生のメカニズム解明と哺乳動物での関節再生の惹起実現を最終目標として行うことで、高齢化社会に向けた新たな創薬や治療方法の開発が期待される。その結果、認知機能の維持による自立生活が可能な「健康寿命の延伸」が可能となる。さらには、日本的労働慣行としての定年後であっても、体力的に問題なく、かつ継続して働きたい人にとっての就労可能年数の延伸という恩恵も想定可能となる。これらの期待される研究成果を医療の現場へ還元すべく、学外の医療分野の研究者と頻回な交流を行う枠組みを設置することにより、実現可能なアイデアを効率的に医療分野へ取り込んでいくことが期待される。

なお、これらの研究成果および進行状況は、年度毎に2回、計10回の開催を予定している公開シンポジウムなどにおいて公表し、同時に学外の同分野の研究者との情報交換により、さらなる展開を議論していく。

② 文理連携体制による統合的議論を踏まえた超高齢社会に向けた提言—<生命社会学>の試み

生命科学のフロント研究の急速な進展による健康寿命の延伸に伴う、さらなる超高齢社会を迎える近未来の社会に我々はどのように対応し、どのような変革をもたらすべきか。①の研究成果を踏まえ、生命科学分野の研究者と、人文科学・社会科学・健康科学の各分野における研究者がともに研究会・シンポジウムで統合的に議論し、「さらなる超高齢社会における社会基盤の整備に向けた提言」をWebおよび書籍というかたちでまとめ、広く一般市民に向けて発信する。テーマとしては、生命科学分野におけるフロント科学の成果をできるだけ早く社会へ還元する社会の仕組みや要介護者への社会的・法的・倫理的対応、事前医療指示に関する新たな提案などが考えられる。このような文理が連携した統合的議論を通じ、生命科学と人文科学・社会科学・健康科学をシームレスでつなぐ<生命社会学>という新たな学際領域の創成に向けた検討と具体的な試みが展開できる。

以上を総じて、学問的論拠に基づいた「超高齢社会の未来に対応可能な社会基盤の整備」に向けた提言が可能となる。

【研究成果の測定方法や自己点検・評価及び外部評価の実施体制】

本事業の自己点検・評価体制として、3名の学内教員（理系2名・文系1名）からなる「2016研究ブランディング事業自己点検・評価部会」を、また、外部評価を継続的に受ける体制として、「2016研究ブランディング事業外部評価部会」をそれぞれ組織する。いずれの部会も、補助事業期間中にわたり、毎年度1回開催する。なお、いずれの部会においても、本事業の研究実施組織である「2016研究ブランディング事業推進部会」が毎年度作成する「研究成果報告書」に基づく聞き取り調査（事前の書面調査を含む）による評価を実施し、項目別評価と総合評価とをS・A・B・Cの4段階で行う。なお、最終年度には、単年度の評価に加えて、研究期間全体としての評価も行う。